

小野十三郎遺漏詩二十四篇

高松 敏男（元中之島図書館）

平成の世である。今更、太平洋戦争下の一篇の詩に問題があるかどうか、提起すること自体に意味があるのかと言われればそれまでである。判断は読者に任せる。しかしいくら歳月が過ぎ、時代が移りかわろうと、事實は事實として、真実は真実として、記録しておかなければならない事柄も一方にはあり、カモフラージュされたままで終らせるより、芸術家や詩人自身が、その事実についてのちどう対処したかが問われなければならない事柄もある。でなければ詩史・文学史・芸術史も意味をなさない。

大阪府立中之島図書館に平成六年六月二六日付で受入れられている、昭和一六年一月一五日発行の月刊漫画雑誌「大阪パック」、「皇軍慰問特輯号」に掲載の小野十三郎氏の詩には、そうした意味での問いが残されていると思えるので、全文を掲載する。

紀元二千六百一年

世紀更まる

第一年。

炳乎として

東亜の海に

いま大きな太陽がのぼる。

かつてわれらの先人が

太古の猛烈な羊齒の中から

うち仰いだ

無垢の光芒

再び地平を射る。

暗い海

山骨の刺々しさ

まがりくねった木々よ

靄よ。

われらは希ふ。

大陸に 海洋に

われらの視野の

明るく大きく晴れわたり

われらの戦ひの前途益々栄あらんことを。

世紀更まる

第一年。

謹みてここに

戦没英霊

並びに皇軍将兵に対して

深き感謝の黙禱を捧ぐ。

これはかつての日本帝国が皇紀二千六百年にかこつけて国民の愛国感情の高揚をはかった時に、「大阪パック」新春臨時増刊の巻頭に、「慰問袋」として掲載されたものである。そしてたまたま偶然にもこの詩を目にした時、時局を共に生きて当時の世相を皮膚感覚で知っている世代とはいえ、平民派の「詩人であると同時に、アナーキズム文学の理論的支柱（アナキスト系の革命詩人の一人）」（伊藤信吉）、そして戦後は「短歌的抒情否定」を宣言した小野氏の詩であっただけに、ぼくは目を疑った。発表された時期が、米軍がガダルカナル島に上陸するよりも、日本が対米英宣戦布告するよりも早く、この時期に、本当に小野氏の詩なのか、と急いで『定本小野十三郎全詩集』、『小野十三郎著作集』（全三冊）を繰り、巻末の寺島珠雄編「年譜」をも確認したものだ。しかしどうしてかこの詩は収録からはずされていて、詳細きわまる二つの「年譜」、『著

作品集』の「補遺」「編注」にも見えない。そこで小野氏の書き残したものを総あたりすることははじめ、どこかにこの詩のことが述べられていないか、と調査を進めてみると、単行本『奇妙な本棚 詩についての自伝的考察』(昭三九・六・二〇 第一書店)中のエッセイ「奇妙な本棚」に、小野氏自身がわが書斎の本棚に並ぶ書物を見ながら、戦時中の自分の精神史を、自己弁護とも、自悔とも、ひらきなおりともつかぬ、文字通り奇妙な内容の回顧がなされている。

要旨はこうである。

「わたしの四畳半の書斎には、組み立て式の本棚が列べて三つ置かれている。これは「二十余年一度も動かしたことがない」。眼をやると、アンバランスな奇妙な配列で、「まん中の本棚の上三段だが、最上段と次の段につまっているのは、もっぱら科学工業に関する本である」。『いずれも戦争中に蒐集したもので、「日本重工業読本」(中略)、「航空機工場読本」(中略)といったところ相ついで出た時局向きの初歩的な本」で、「わたし自身の生活とも能力ともあまり直接かんけいのなさそうな書物がかなり大量に仕込まれていることも奇妙だが」、それらと「対照的にその本棚の三段目に」は、「日本古典に関する研究書や鑑賞本がずらりと列んでいる」。『万葉集がもつとも多く』、茂吉の「柿本人麿」、保田與重郎の「万葉集の精神」、蓮田善明の「神韻の文学」という恐るべき本も収まっている。『わたしはそのころ、朝に「日本重工業読本」を読み、夕に「万葉集の精神」を読んでいたことはまずまちがいない。そして「万葉集の精神」に危く引きこまれそうになってハッと気がついたとき』、わたしは「作業教本や技術書にしがみついた」。

「しかし、この昔のままに上下に配列されている」「書物のコントラストは」、戦時下において一人の詩人が経験した精神の往反運動の模様を示すものである。『わたしは純然たる知識として学んだ旋盤やフライス盤の構造や』、「各種ゲージ類の個別的な性能そのものの中にも」、文学的古典の研究書や鑑賞本のあるものから影響を受けた精神主義がしのびこんでいなかっただと云えない。『わたしはその直後、「大阪朝日」の求めに応じて「空の要塞飛ぶ」という詩を書いて、その四発爆撃機の機胴に描かれた日の丸を讚え、「見ていたら涙が出た」と云っている。また、当時「毎日」の記者をしていた井上靖が、物質的に不如意な生活をしていたわたしに多少の原稿料でもという好意から』、「陸軍記念日に題する詩を一つたのまれ」、『明治の軍歌』という詩をよせました。『さらに文学報国会の』「辻詩集」に寄せた「木と鉄と鋼」、『毎日』に書いた「質と量」では、「質において、量においても敵をしのぎ、物や兵器の不足のために流される同胞の血の一滴を惜しみ、防ぎとめよう」と露骨に心情を吐露した言葉を綴ったことを、「一体わたし

は本気でそんなことを考えていたのだろうか」と煩悶、しかし「わたしが学んだ思想と、その思想によって裏づけされ、支えられた感情に即して云えば、その場合、沈黙こそが最も確実な手段であったかもしれない」。そして、「その沈黙に耐え得ずして」、「求められれば、虚名と多少の物質的な報酬がからんで、これが拭い難い汚点となり、命とりとなることも考えずに、このような詩を書いた事実はかくすことができない」。「本質的には、高村光太郎をはじめ当時多くの詩人が書き、戦後それによって文学者の戦争責任の問題を問われた「愛国詩」の基調にある訴えの性質と少しも変わりはないか」と自悔する。が、この前半の自悔的モノローグは、後半になると、ひらきなおりともとれる口調にだって変わる。

すなわち、「わたしのこれからの作品の多くは黙殺された」。「わたしの目にふれたところでは、まだこの証拠物件を決め手として、わたしの戦争責任を摘発しようとした者はない。吉本隆明にそれがあるときいているが、彼が発見できたのは、たぶん文学報国会の「辻詩集」の中の一編くらいだろう。戦後に出したわたしの五冊のどの詩集にもこれらの作品は収録されていない。わたし自身が黙殺したのである。だがわたしはそれにより証拠いん滅を計ったわけではない。現にこれらの詩は、一冊のスクラップブックに製作年月の順に貼って保存されており、もし戦時中わたしという一人の詩人の精神の位相を材料としなにごとかを研めようとする人がいるなら（目下、わたしがそれを使用中だが）いつなんどきでもこの切抜帖を提供する用意がある」。「参考資料ならまだ他にもかなりあるから」、「いい気な部分に容赦なくメスを入れてもらえたらありがたい」と云い切る。

寺島珠雄氏は、『定本』の「年譜」でこの時代の小野氏のことを、「このころ科学技術書を多く読む。戦時下精神主義への平衡剤。自己抵抗。しかし、時局詩を書かないわけにはいかなかった」と要約している。

ところでぼくは、これまで小野十三郎氏の残した「奇妙な本棚」というエッセイと、「紀元二千六百年」という一篇の詩にことさらこだわってきたが、それはぼくが昭和二〇年三月一四日の未明に大阪の密集した市街地で、B29の焼夷弾の中を逃げ惑った体験が忘れられずに、小野氏の戦争責任を追及しようとしているのではない。N・ベルチャーエフが『わが生涯』で述べているように、時代にはそれぞれその時代特有の気分があり、R・シュタイナーの神秘思想でさえ、一時期ヨーロッパの思想界を席卷したぐらいであるから、一人の生活に追い詰められた詩人が時局に便乗し、戦争賛美を詩に刻みつけたからといって、そこにどれだけの責任が問えるかは疑問

である。むしろ、文学者の場合の戦争責任を問題にするなら、中之島図書館正面に碑があり、戦中に『愛国百人一首』を編さんした川田順氏こそ先陣を走ったと云えそうである。が、小野氏の場合に限って特に気になるのは、その対処の仕方である。氏は「奇妙な本棚」の前半で、自己の精神史をかえりみて、自悔の姿勢を見せながら、後半にいたると、俺の腹はすわっているんだといわぬばかりに、「証拠いん滅をはかったのではない」、「いつなときでもこの切抜帖を提供する用意がある」、「容赦なくメスを」とひらきなある。にもかかわらずこの「パンドラの函」は遂ぞ開けられることはなかった。繰り返すが存命中に編集・発行された『定本全詩集』、その補遺版『小野十三郎著作集』第三巻、いずれの巻末の詳細な「年譜」からも抹消されたままである。

かつて本多秋五氏は、「近代文学」同人の座談会で、戦争責任の問題は、「当事者として、文学者が自発的に考えることが真っ先に行われなければならない」、「文学者の責務」昭二・四「人間」と言葉を残したが、一度活字となって世に出たものは、自身の手でまっ先におおやげにすべきである。例えその行為によって一時期批判を浴び、傷つくことがあっても。小野十三郎という詩人の果たした役割と評価は、それによって見失われるものではない。

以下、先に引用の「紀元二千六百年」を除き、多くの調査しえた範囲での、小野氏の遺漏詩の紹介を果たしておきたい。但し、「大阪パック」掲載のものは、現在では大阪府立中之島図書館の書架で閲覧可能なので、巻末に詩の題名のみ記載にとどめる。

夜釣り

「あしかび」第1集

昭二六・四・一

伝馬を横づけ

かたむいた屋根の上にあがって

天明まで糸をたれている。

眼下の海は暗く且つ深い。

廃墟と化した製鋼所の大鉄骨構造か

その中にどつぷりと沈んでいるのである。

かれらがときどき交わす会話や

咳ばらいは

しかしそこへは

達しない。

その中は

いつもひんやりとしている

くつ音もしわぶぎも

本をめくる音も

高い天上に冴えたひゞきとなる

しつとりと紙にとけこんだ活字よ

かすかなかびのにおいよ

きみがそうしてうつむいて

くいいるように

ひらいた本の頁に眼をそゞいでいるとき

重い足どりで

時はしづかにきみのかたわらに歩みきたり

じつときみを肩こしに見守っている

あゝ 中之島図書館 五十年の歴史

木枯しの夜も

明々と灯あかりをつけて。

「大阪パック」掲載詩（以下題名のみ）

- | | | | |
|----------|---|--------|----------|
| “ 世相戯詩 | 通天閣異変／偽刑事横行す／掏摸の教訓 | 三五卷一〇号 | 昭一五・一一・一 |
| “ 世相戯詩 | 日米対抗猫八試合／爆弾町会／雨天好日 | 三五卷一一号 | 昭一五・一二・一 |
| “ 世相戯詩 | 薪炭バスと国民性／わが家の家庭料理 | 三六卷一号 | 昭一六・一・一 |
| “ 世相戯詩 | 仏とぶつかつた僧侶／死の奇病事件／埋蔵金伝説 | 三六卷三号 | 昭一六・二・一 |
| “ 世相戯詩 | 彗星南方よりきたる／硫酸法／卓上ピアノの遍歴 | 三六卷五号 | 昭一六・四・一 |
| “ 世相戯詩 | 烏賊 <small>いか</small> の甲羅 <small>こっこう</small> ／市場の魚屋が一匹の大鯛を仕入れてきた／
富士山から石油が出るといふ話 | 三六卷六号 | 昭一六・五・一 |
| “ ニュース詩集 | スコットランドのゆりかもめ／ケエト・スミスが歌つてゐる／ | | |

ほつれん草飢饉／倫敦の犬

三六卷二二号 昭一六・一一・一